

# 「しんの優しさ」を共に生きる人

吉田博子第十詩集『いのち』に寄せて

ふるさと

1

私たちは自らの命や地上の生きものたちを粗末にしないで、その命を子や孫の世代に引き継ぐことができるだろうか。命を信じ命を温めながら育てることが可能だろうか。そのためにはただ自分たち人間という種族を生み育てることだけでなく、人間以外の命そのものへの畏敬の念が根底になくてはならないだろう。そこから人間を相対化し多様な命とともに人間が共生できるかどうか、いま試されているのだろう。吉田博子さんの詩は、そんな命の根源を見詰めている。平明な詩行の奥に運命に翻弄されながら、抽象的な命ではなく、個別の「いのち」を見詰めている。そしてその「いのち」の在りかを探し求める。故郷とは「いのち」が引き継がれる場所ではなかったか。自分は果たして「いのち」を誰かに引き継ぐことができるのか。そんな揺れ動く一人の人間の内面を抱えた切実な問いが感じられる。例えば第九詩集『咲かせたい』の中に詩「ふるさと」がある。この詩には吉田さんが生涯こだわり続けているテーマが記されている。

母は  
おいしい湧き水の側  
母は  
ふつくらとした大きな山懐  
母は  
ほほえみの優しさ  
母はふるさとの山の匂い  
海の薫りたつ  
魚売りの母  
つかい谷で鋤をふるう  
玉葱やじゃがいもを植え  
たくさんの子を育て  
母は  
井戸ですいかやトマトを冷し  
わたしに食べさせた  
父も魚売り  
わたしの手を握り  
大きゅうなつたなあ、と笑った  
わたしに向かう時  
父も母も笑顔だった  
わたしの心の奥に大切にしまわれている宝物

父と母の笑顔  
自然からのいただき物  
おいしい水とおいしい食物  
父も母も貧しかった  
だがわたしは苦しい時も  
父母の笑顔を思いうかべるだけで  
のりこえ生きてきた  
今は父も母もない  
わたしは子供達にとびきりの笑顔で  
接してきただろうか  
過ぎてきた時は  
思い出の中に  
父母の優しい笑顔を  
一層すがすがしく焼き付ける

第八詩集『立つ』のあとがきによると、吉田さんは七人兄弟の三番目の子供であったが、六歳の時に生母の妹夫婦の養女となった。吉田さんがどのような思いでそのような運命を引き受けたのかは語ってはいない。しかし自分ではどうしようもできないところで、二組の父母を持つことになった複雑な思いは生涯続いているのだろう。この詩に出てくる父母は産みの父母のことだ。この詩が感動的なのは、「わたしは苦しい時も／父母の笑顔を思いうかべるだけで／のりこえ生きて

きた」と語っていることだ。そして「わたしは子供達にとびきりの笑顔で／接してきただろうか」と自問していく。産みの親が養女に出してしまった娘に対して我が子のように「優しい笑顔」で接してくれたことは、自分のことを忘れずに愛し続けているのだということ吉田さんが直観したからだろう。吉田さんはこの瞬間に自分の運命を素直に受け入れて、産みの父母と育ての父母の両方に感謝したに違いない。実はこの詩を読むたびに、私は染織家の志村ふくみさんの随筆集『一色一生』の「母との出会い・織機との出会い」という文章を想起してしまう。志村さんは二歳の時に叔父夫婦の養女になった。十六歳の時に偶然に自分の赤ん坊の頃の写真を見ると裏には小野ふくみと書いてあった。伯父の一家が小野姓であることを思い出し、伯父夫婦の四人の子供の三子と四子の間が離れていてそこに自分を入れるとびつたりすることに気づいたという。それから伯父夫婦宅を訪ねたりしたが、打ち明けることもできずに悩み続け、二年後に従姉に「私の姉ではないか」と思い切って訊ねた。すると姉は烈しく否定して帰ってしまったという。姉からその話を聞いた生母は、志村さん呼び寄せて家族全員の前で泣きながら本当のことを話し、「かんにんしてや」と告げたという。その時の滞在中に母が使用していた織機はたで藍の糸を織るのを見せてくれたことが、後の志村さんの運命を大きく変えていったのだ。吉田さんの場合は六歳であったので秘密にされてはいなかった

と思われるが、六歳の幼児に親を選ぶことなど不可能であつたらうし、二組の父母がいる複雑な思いは同じであつたらう。それゆえ吉田さんは「父母の笑顔」の中にいつも自分の幸せを願っている優しさを信じながらも、自分とは何者なのかと問い続けてきたのだらう。

吉田さんにとっての人間への信頼と感謝の思いは、次に引用する詩「しんの」を読めばよく伝わってくる。

### しんの

その人間のしんの優しさを

わかる人は

尊いことだ

その人のかくれた優しさを

みつけられる人は

人の心の尊さが

わかる者だ

うれしい人だ

そんな人とは心の底から

笑える

そんな人とは心の底を

みんなみせられる

まっ白い胡蝶蘭の大小の鉢や

シクラメンの色とりどりの鉢があつても

わたしの娘は

小さなお正月用の葉ボタンの

並べられた中において

洗いざらしたエプロンをつけ屈んでいる

じっと 一つ一つビニールの入れ物に植えられた

小さな苗のような葉ボタンをみつめている

花屋さんでも一番すみっこに

自分の居場所をおいて

うつむいている娘よ

お化粧もせず

掃除ばかりして

いつも裏方にまわる

花が好きで

種から育てるのが好きで

職を転々とするうち

花いっぱいの中に自分をおいて

仕事をしてみようと思った

他人にだまされたり

書店の人に気の毒だからと

わざと破れた本を選んで買ったり

スーパ―に行つても

吉田さんの視線は「しんの優しさ」を透視しようとしている。「しん」が「真」であるか、「心」であるか、「深」などであるかは読むものに託されている。その意味では詩行にいかにか「笑顔」や「優しさ」を潜めようと試みるのが吉田さんの詩篇の特徴だろう。人の美点として「しんの優しさ」を見出そうとすることは、吉田さんが誰よりもまっさらにものを直視しようとしているからだ。「その人のかくれた優しさを／みつければる人は／人の心の尊さが／わかる者だ」という人間観を吉田さんは語る。「かくれた優しさ」とは、きつと「心の底」を見詰め、「心の底」に促されて行動する者の美徳なのだろう。

### 2

新詩集『いのち』は、第一章「たつくと娘」九篇、第二章「備前へ」十四篇、第三章「いのち」十一篇の計三十四篇から成り立っている。既刊九冊の詩集のテーマをより深く問い直した詩集だ。吉田さんの詩は、心の驚きをそのまま記述していこうとする衝動を感ずる。第一章の九篇は吉田さんの娘さんとお孫さんの素顔を素描しながら、多くのことを考えさせてくれる詩篇なのだ。その中でも詩「わたしの宝物」は私が最も気に入っている作品だ。

### わたしの宝物

一番賞味期限のぎりぎりのを買う  
お店に人に悪いから と言う

そんなあなたに

神さまはお遣わしになったのでしよう

高機能自閉症のたつくんを

きつと大切に育てられる

そんなあなただからこそ

貧者の一灯そのものに

小さな小さな明かりを捧げる

影にうづくまるあなた

広い広い宇宙に

いつでも輝く一番星のように

またたく わたしの宝物

吉田さんは世間体や固定した常識にはとらわれていない純粹な心を大切にしている。人間はもちろん、事物の真実を見ようとしていることがよく分かる。人間の美徳とは自分の利益をこつと最優先する行動原理ではなく、ハンデのある人びとや地球の他の生きものと共生していこうと、身近なところで心掛けて行動することに価値を置いているのだろう。企業や団体がお祝い事に贈る花として高価な胡蝶蘭がある。この花がずらりと並んでいるのを見ると私は違和感を感じて、

少しもその花を愛でる気がしなくなる。道端にけなげに咲いている野の花の方がよほど美しいと感じている。日本の企業や団体の担当者が花を贈る常識的感覚より、吉田さんの娘さんのように葉ボタンのさりげない色彩を好む人の方が私には健全に感じられる。野の花でも胡蝶蘭でも同じ花であり、胡蝶蘭の方が価値があると感じるなら、多様な自生する花ばなの原種の美しさに気づいていないのかも知れない。

この詩「わたしの宝物」を読む度に、私は宮沢賢治の童話「虔十公園林」を思い出す。賢治の問いは、本当の賢さとはなんだだろうかという問いであった。馬鹿にされながらも信念を持って木を植え続けた虔十の行為が、後になってみんなの憩いの場所となった。吉田さんの娘さんは、他者の幸せを願って何の見返りもなしに当たり前のように自然に行為している。よほど美しい魂を持ち続けている方だと私には感じられる。その娘さんを「わたしの宝物」と言う吉田さんもまた、そのような心持ちを抱いて生きてこられたのだろう。生きることが大変で人を顧みない社会の風潮のなかで、とてもさわやかな思いを感じさせてくれる詩篇なのだ。ひどい格差社会になってしまった日本社会を、根底から人間らしい社会に変えていくには、吉田さんの娘さんのような精神性から多くの学びべきところがあると思われる。

### 3

小さなあかりの蛍をなん匹もなん匹も  
数えきれぬなかに

わたしの姿も踊り手のように

盆踊りの輪のうちにまぜてくれませんか

遠くに聞こえる歌声は

おじいさんのひとり歌い。

高く低く

清らかなせせらぎの

さらさらという音を響かせる

あの谷川に

わたしを誘ってくださいませんか

甘い甘い水を飲んだら

身体中がすきとおって

もう見えなくなってしまうかもしれません

汽車のまるいあかりをつけて

もう少し待っていてください

片上りきの

あのガタゴト列車に

足に小さな翼をつけ

きつときつとかけつきますから

吉田さんの身体から魂が抜け出てしまつて片上りきの「銀河鉄道」に乗り込むような情感に満ちた詩だ。六十歳を過ぎ

第二章「備前へ」の十四篇は、吉田さんが養女となつて暮した備前から、生母のいる備前へ帰郷することへの憧れに満ちた詩篇だ。「片上りき」列車にに乘ることが母に会える喜びに繋がっていくことを夢みていたのだろう。母の顔に自分の顔を見出すことで吉田さんは自ら何ものであるかを理解していった。二章の最後の詩「片上りき」には、吉田さんの尽きることのない魂の故郷へと帰っていく懐かしい旅が記されている。

#### 片上りき

ちよつと風が吹いていて

芽ぶいた木々の森の奥に

待っていてくれるでしょうか

わたしを乗せてくれるかしら

物語をひとりがたりに

ぶつぶつと口の中で反芻する

歳老いた女を。

時には幼児のようになつてこされたり

髪を静かに静かにいけども

そおつとなでられたりしながら

座席に乗せてくれませんか

次第に夜が訪れて

た吉田さんは、この片上りきの列車を想像すると六歳の少女に返つてしまうのだろう。そして故郷の祭の盆踊りの輪の中に母に手を引かれながら入っていくのを夢見続けるのだ。そんな魂の故郷は吉田さんが自ら詩で表現するしかなかった。父母の待つ故郷への感謝と憧れを抱き続ける吉田さんは、人間が生きることにおいて根幹に据えなくてはならないものを指し示しているように思われる。人間が自然から離れすぎて利便性のもとに取り返しのつかない自然を破壊してしまった。しかしこの詩を読むと、破壊された自然や共同体をもう一度再生して、懐かしい人たちとの再会を幻視している。そのため「足に小さな翼をつけ／きつときつとかけつきますから」と吉田さんは真に願っている。吉田さんの詩篇を家族の再会を願う人たちや「しんの優しさ」を探し求める人たちに、また故郷を離れているが故郷を決して忘れることのない人たちに読んで欲しいと願っている。最後に第三章の詩集タイトルの詩「いのち」を引用してこの小論を終えたい。

#### いのち

木がいます と

タイ語ではい

木には命が宿っているからだ という

国の言葉が

生きとし生けるものと

命をもっとも大切にしている源  
戦争は人の命を粗末にすること

人間同士が敵対して

殺し合いをする

ことわざにも

「二寸の虫にも五分の魂」とある

一つ二つの生に命の輝きが

あかりを点している

たとえ小さな灯でも

命が消えてゆくまで大切に大切に両手で

囲み守ってゆくことが

一番大切なこと

花は美しく咲き散ってゆく

命の儂さを嘆くことはない

継がれてゆく

たとえば球根となり実となり種となつて

次世代へと引き継がれる

人の命も亡くなつても

その命を育みその命の輪となつて

生きた者達の心の中で

大事に継がれる思い出となり

来世に生まれ変わる

森の中で

命のささやきが聞こえませんか

逝つたあなたに語りかける声に

答えるこだまが響くように

吉田さんは家族の命を見詰めることによつて「生きとし生けるもの」の「命の輪」である「共生」を感じている。そして共に生きることの切実さをさりげなく告げている。また「命の儂さを嘆くことはない」と言い放つ。「いのち」は引き継がれるものであり、「しんの優しさ」は見出されなければならぬいからだ。吉田さんはこれからもきつと、静かに「いのちの共生」を粘り強く問い続けていくのだろう。